東洋大学メディアコミュニケーション学科

海野ゼミ 書誌事項の記載規則2013年夏版

（目　次）

 はじめに

 Ａ．図書一般

 Ｂ．翻訳書

 Ｃ．合集単行書の一部（論文集・短編集）

 Ｄ．事典・辞書の一項目

 Ｅ．逐次刊行物掲載記事（学術論文）

 Ｆ．新聞記事

 Ｇ．インターネットリソース

 Ｈ．二度以上引用する場合

 Ｉ．一般的な注意事項

 参考　注・引用文献の実例

はじめに

＊まず、論文で資料のデータをきちんと記載するのは、たいへんな労力と時間がかかることを肝に銘じること。とりあえず「参考　注・引用文献の実例」を眺めて見るとよい。

（凡例）

・以下の規則では、国内資料の記述には全角文字、海外資料の記述には半角文字を用いることを原則としている。

・{ }の部分は必要に応じて記載する項目である。記載する場合は｛ ｝自体は書かない。

・行末ではない半角カンマ(,)と半角ピリオド(.)の後には、半角スペースを入れることを原則としている。（p. vol. no.の後には入れなくてもよい）。

・"と'（半角コーテーション）は、MS Wordの「オートコンプリート」をオフにしないと、半角にしたくても全角に変換されてしまうので注意すること。

・括弧などの使い方は次のとおり。

　（全角文字）

　　『　』　　　図書、雑誌・新聞のタイトル（ＡＢＣＤＥＦ）

　　「　」　　　図書の一部、辞書・事典の見出し、ウェブページのタイトル（ＣＤＧ）

　　“　”　　　雑誌記事、新聞記事、論文のタイトル（ＥＦ）

　　［　］　　　翻訳書について、原書のデータ（Ｂ）

　　〈　〉　　　図書の一部について、図書全体のデータ（Ｃ）

　　（　）　　　叢書名、ウェブページの説明、その他の補記（ＡＧ）

　　｛　｝　　　書誌事項の記載には使用しない。

　（半角文字）

　　" "　　　図書の一部、辞書・事典の見出し、ウェブページのタイトル、

　　　　　　　　雑誌記事、新聞記事、論文のタイトル

　　*italic*　　　　図書、雑誌・新聞のタイトル

Ａ．図書一般

（和書）

　著者名『書名』{版表示}{出版地，}出版者，出版年．p. 該当ページ．{（叢書名）}

　例：近藤次郎『社会科学のための数学入門』東洋経済新報社, 1973. p. 37-40.

　例：鈴木隆『匂いの身体論：体臭と無臭志向』八坂書房, 1998. 244, viii p.

　例：木田元他編『コンサイス20世紀思想事典』第2版　三省堂, 1997. p. 862-863.

　例：郵政省編『通信白書』平成10年版. 大蔵省印刷局, 1998. p. 220-230.

（洋書）

　著者名. 書名. {版表示.} 出版地, 出版者, 出版年. p. 該当ページ. {（叢書名）}

　例：Hart, Andrew. *Understanding Media: a Practical Guide*. London, Routledge, 1991. p. 5.

　例：Barzun, Jacques and Graff, H. F. *The Modern Researcher*. rev. ed. New York, Harcourt, 1970. p. 165.

・著者名は、姓、名の順に記載する。洋書の場合は、姓と名のあいだに半角のコンマとスペースを挟む。

　例：Price, D. J. de Solla.

・共著者がいる場合、著者数が２名の場合は、和書はコンマ、洋書は"and"を用いて連記する。３名以上の場合は、和書は他、洋書は"and others"を補う。

　例：Vickery, Brian C. and Vickery, Alina.

　例：King, E. W. and others.

・洋書の場合、書名を*イタリック体*にする。

・版表示（版次）は初版でなければ必ず記載する。改訂版の場合は「改訂版」または"rev. ed."を補う。なお、版次と刷次の違いに注意すること。

・出版地は、和書は東京の場合は省略する。洋書は原則として都市名を記載する。

・該当ページは、２ページ以上にまたがる場合、ハイフン"-"でつなぐ。著作全体が参照対象である場合は、総ページを示し、"p."を後ろに付記する。

　例：p. 9-25. p. 1355-1357.

　例：224 p. xiv, 862, xix p.

・叢書名とは、シリーズ名、全集名、講座名などのことである。

　例：（岩波新書）　（講談社学術文庫）　（NHKブックス）　（筑摩世界文学大系）

Ｂ．翻訳書

（和書）

　原著編者名. 『翻訳書名』［*原書名*. {版表示.} 出版事項］翻訳者名. {出版地,} 出版者, 出版年. p. 該当ページ.

　例：Vargas, Marjorie Fink.『非言語コミュニケーション』[*Louder than Words: an Introduction to Nonverbal Communication*. Ames, Iowa State University Press, 1986.]石丸正訳. 新潮社, 1987. p. 15.

　例：Darwin, Charles Robert.『人間及び動物の表情・はん縁植物の運動と習性』[*The Expression of the Emotions in Man and Animals*. London, John Murray, 1872.] 村上哲夫・石原辰郎訳. 白楊社, 1938. 703 p.（ダーウィン全集; 8）

（洋書）

　原著編者名. *翻訳書名*. ［原書名. {版表示.} 出版事項］翻訳者名. 出版地, 出版者,

　出版年. p. 該当ページ.

　例：Schneider, Georg. *Theory and History of Bibliography*.［*Handbuch der Bibliographie*. 3. Aufl., 1930.］tr. by R. R. Shaw. New York, Columbia UniversityPress, 1934. p. 14-15.

・洋書の書名は*イタリック体*にする（イタリック体にできない場合は下線）。

・和書の翻訳者名には、訳（１名の場合）、共訳（２名の場合）、等共訳（３名以上の場合）、監訳を付記する。洋書には、"tr. by"を付記する。

Ｃ．合集単行書の一部（論文集・短編集など）

（和書）

　当該部分の執筆者「当該部分の題名」〈編者名『書名』{版表示}{出版地,}

　出版者, 出版年〉p. 該当ページ.

　例：宮坂広作「余暇と社会教育」〈碓井正久編著『社会教育』第一法規, 1970〉p. 201-233.

（洋書）

　当該部分の執筆者. "当該部分の題名." 〈編者名. 書名. {版表示.} 出版地, 出版者,

　出版年〉p. 該当ページ.

　例：Groom, Geofrey. "Bibliography of Older Material." 〈Gavin, L. H. ed. *Printed Reference Material*. 2nd ed. London, Library Association, 1984〉p. 456-501.

・合集単行書とは、図書形態の論文集、短編集など、刊行済みの著作を編集して１冊にまとめたもののこと。

・著作（合集の構成要素）のタイトル（論文タイトル）は "　" でくくる。

・和書の編集者名には、編、編著（１名の場合）、共編（２名の場合）、等共編（３名以上の場合）、監修を付記する。洋書には"ed."、"eds."（２名以上の場合）を付記する。

Ｄ．事典・辞書の一項目

（和書）

　｛該当部分の執筆者｝「見出し」〈編者名『書名』{版表示} {出版地，}出版者, 出版年〉

　p. 該当ページ.

　例：鷲田清一「身体」〈今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社, 1988〉p. 340-342.

　例：大須賀節夫「知識ベース」〈北川高嗣他編『情報学事典』弘文堂, 2002〉p. 586-588.

・事典・辞書の一項目は、基本的に「Ｃ．合集単行書の一部」に準じて記載する。

・事典・辞書データベースで検索した場合、印刷物を収録したものならば上記Dに従う。

　印刷されておらず、ネット上にしか公開されていない場合は、後述するGに従う。

Ｅ．逐次刊行物掲載記事（学術論文など）

（和雑誌）

　執筆者名“論題名”『掲載逐次刊行物名』 vol.巻, {no.号,} 発行年{月},

　p. 当該ページ.

　例：小野寺夏生, 中井浩“単純なモデルからのZipfの法則の導出”『情報科学技術研究集会発表論文集』 vol. 12, 1975. 3, p. 129-138.

　例：小野寺夏生“‘Bibliostatistics’:情報現象の統計学的説明”『情報管理』 vol. 21, no. 10, 1979. 10, p. 782-802.

（洋雑誌）

　執筆者名. "論題名," *掲載逐次刊行物名*, vol. 巻, {no. 号,} 発行年{月},

　p. 該当ページ.

　例：Brookes, Bertram C. "Theory of the Bradford Law," *Journal of Documentation*, vol. 33, no. 3, 1977. 6, p. 180-209.

　例：Nelson, Michael J. and Tague, Jean M. "Split Size-Rank Models for the Distribution of Index Terms," *Journal of the American Society for Information Science*, vol. 36, no. 5, 1985. 10, p. 283-296.

・逐次刊行物掲載記事の典型は、学術雑誌に掲載された論文（雑誌論文）である。

・洋雑誌の場合、誌名をイタリック体か、下線を引く。

・本規則では「論題名→逐次刊行物名→巻→号→発行年月→ページ」を、すべてカンマでつなげる。ピリオドを使わないのは、これらの事項をひとまとまりと捉えているため。

Ｆ．新聞記事

（国内）

　{執筆者名}“記事題名”『紙名』{朝刊・夕刊} {発行本社, } 発行年月日,

　p. 該当ページ.

　例：海野敏“新国立劇場バレエ団「ドン･キホーテ」”『朝日新聞』夕刊, 東京, 2002.5.20.

　　　p. 21.

（海外）

　{執筆者名} "記事題名" *紙名* {朝刊・夕刊} {発行本社, } 発行年月日,

　p. 該当ページ.

・新聞記事データベースで検索した記事も、紙面に印刷された記事ならば上記Fに従う。

　紙面に印刷されず、ネット上にしか公開されていない記事の場合は、次のGに従う。

Ｇ．インターネットリソース

（国内）

　{制作者}「タイトル」URL:Uniform Resource Locatorの記述

　{更新 更新年月日} {　参照 アクセス年月日}.

　例：「東洋大学ホームページ」URL:http://www.toyo.ac.jp/　更新2001-04-01.

　例：海野敏（個人のホームページ）URL:http://www.soc.toyo.ac.jp/faculty/umino.html

　　　参照2002-06-19.

　例：Weblio辞書－産業・環境キーワード「ツイッター(Twitter)」

　　　URL:http://www.weblio.jp/　掲載2009-11-28. 参照2012-07-17.

（海外）

　{制作者. } "タイトル." URL:Uniform Resource Locatorの記述

　{更新 更新年月日} {　参照 アクセス年月日}.

　例：Zakon, Robert H. "Hobbes' Internet Timeline v4.2." URL:http://info.isoc.org /guest/zakon/Internet/History/HIT.html　参照2002-05-14.

・タイトルが特定できない場合は（ ）内に説明を補う。

・更新年月日が特定できない場合は、アクセスした年月日を補う。

・WikipediaなどのURLを記載するときは、URLエンコードの部分は記載しないこと。

　例：×http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E4%B8%8A%E5%86%86%E4%BA%86

　　　○Wikipedia「井上円了」URL:http://ja.wikipedia.org/wiki/

Ｈ．二度以上引用する場合

・前掲書中＝２つ以上前に引用したものの場合

　著者姓, *op. cit.*, p. 該当ページ.

・上掲書中＝直前に引用したものの場合

　*Ibid.*, p. 該当ページ.

　例：

　　22)Stewart, Brian. "A community Adult Education Service," Adult Education, vol. 49, July 1976, p.69.

　　23)Kelly, T. George Birkbeck: Pioneer of Adult Education. Liverpool, Liverpool Univ. Press, 1957, p.86, p.243-245.

　　24) Stewart, *op. cit.*, p.71. ←22)と同じ資料の別の箇所を引用

　　25) *Ibid*., p.72. ←24)と同じ資料の別の箇所を引用

・"op. cit."、"Ibid"はラテン語。これらは*イタリック体*にすること。

・同一姓の著者がいる場合は姓のみでなく名も添える。

Ｉ．一般的な注意事項

・書誌事項を書くときの大原則は一貫性である。

・形式をそろえること。ピリオドのひとつにいたるまで、完璧にそろえる。形式では、ピリオド、カンマ、引用符、括弧を全角にするのか半角にするのかもそろえる。たとえば和書は全角、洋書は半角というそろえ方もある。（「はじめに」も参照。）

・データの有無をそろえること。副書名を書いたり書かなかったり、洋書の原書名を書いたり書かなかったりなど、データが不ぞろいになってはいけない。

・外国語のつづりでは、大文字と小文字の区別にも留意すること。ここにあげた例では、書名や論題で、冠詞、前置詞、接続詞以外は大文字で始めるようにそろえた。

・「わかればいい」という考えを捨てること。書誌事項が一貫性をもって記述できているかどうかも、研究能力や論文の出来栄えの評価基準となる。

・冒頭に書いた通り論文で資料のデータをきちんと記載するのは、たいへんな労力と時間がかかることを肝に銘じること。

（以上）

（参考）注・引用文献の実例

 1) McLuhan, Marshall.『メディア論』[*Understanding Media: The Extension of Man*. New York, McGraw-Hill Book Company, 1964.] 栗原裕，河本仲聖訳. みすず書房, 1987. p. 7-22.

 2) *Ibid*., p. 7.

 3) *Ibid*., p. 3.

 4) 木田元他編『コンサイス20世紀思想事典』第2版. 三省堂, 1997. p. 862-863.

 5) McLuhan, *op. cit*., p. 79-376.

 6) Shannon, Claude Elwood and Weaver, Warren.『コミュニケーションの数学的理論』[*The Mathematical Theory*. Illinois, University of Illinois Press, 1949.]明治図書出版, 1969. p. 164.

 7) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編『図書館情報学ハンドブック』第2版. 丸善, 1999. p. 176-178.

 8) 海野敏「メディアの多様化とネットワーク情報資源」〈日本図書館学会研究委員会編『ネットワーク情報資源の可能性』日外アソシエーツ, 1996.〉p. 7-36.

 9) 公文俊平『情報社会論』NTT出版, 1994. p.391-403.

10) Hart, Andrew. *Understanding Media: a Practical Guide.* London, Routledge, 1991. p. 5.

11) 竹内郁郎他編著『メディア・コミュニケーション論』北樹出版, 1998. p. 14, p. 65.

12) 郵政省編『通信白書』平成10年版. 大蔵省印刷局, 1998. p. 220-230.

13) Jean, Georges.『記号の歴史』[*Langage de Signes L'ecriture et son Double*. Paris, Gallimard, 1989.] 矢島文夫監修. 創元社, 1994. p. 154-156.

14) Jean, *Ibid*., p. 41-44.

15) *Ibid*., p. 165-167.

16) Morris, Desmond.『マンウォッチング（上）』[*Manwatching*. London, Elsevier, 1977.］藤田統訳. 小学館, 1991. 上巻 p. 50-78.

17) *Ibid*.

18) *Ibid*., 下巻 p. 193-212.

19) 嗅覚・非言語的身体系メディアを論じたものとして、次の著作がある。

　鈴木隆『匂いの身体論：体臭と無臭志向』八坂書房, 1998. 244, viii.p.

20) Elam, Keir.『演劇の記号論』[*Semiotics of Theatre and Drama*. London, Methuen, 1980.]山内登美，徳永哲訳. 勁草書房, 1995. p. 5-109.

21) Boorstin, D. J.『幻影（イメジ）の時代：マスコミが製造する事実』[*The Image or What Happened to the American Dream*. New York, Atheneum, 1962.]星野郁美，後藤和彦訳. 東京創元社, 1964. 340 p.

22) Baudrillard, J.『シミュラークルとシミュレーション』[*Simulacres et Simulation*. Paris, Galilee, 1981.]竹原あき子訳. 法政大学出版局, 1984. p. 220.

23) 亘明志「メディアと身体」〈井上俊他編『身体と間身体の社会学』岩波書店, 1996.〉p. 209-227.

24) McLuhan, *op. cit*., p. 3.

25) Ong, Walter J.『声の文化と文字の文化』[*Orality and Literacy: the Technologizing of theWord*. London, Methuen, 1982] 桜井直文他訳. 藤原書店, 1991. 405 p.

26) 吉見俊哉「電子情報化とテクノロジーの政治学」〈井上俊他編『メディアと情報化の社会学』岩波書店, 1996.〉p. 7-46.

27) *Ibid*., p. 20-23.

28) 鷲田清一「身体」〈今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社, 1988.〉p. 340-342.

29) Merleau-Ponty, Maurice.『知覚の現象学』[*Phenomenologie de la Perception*. Gallimard, 1945.]中島盛夫訳. 法政大学出版局, 1982. xiv, 862, xix p.

30) 市川浩『精神としての身体』勁草書房, 1975. p. 3-27.

31) 市川浩『〈身〉の構造：身体論を超えて』青土社, 1997. p.11.

32) 大澤真幸『電子メディア論：身体のメディア的変容』新曜社, 1995. 352 p.

33) Vargas, Marjorie Fink.『非言語コミュニケーション』[*Louder than Words: an Introduction to Nonverbal Communication.* Ames, Iowa State University Press, 1986.]石丸正訳. 新潮社, 1987. p. 15.

34) 野村雅一『しぐさの世界：身体表現の民族学』日本放送協会, 1983. 252 p.

35) 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学：身体がしめす社会の記憶』中央公論社, 1996. p. 207-218.

36) Darwin, Charles Robert.『人間及び動物の表情 ・はん縁植物の運動と習性』[*The Expression of the Emotions in Man and Animals*. London, John Murray, 1872.]村上哲夫，石原辰郎訳. 白楊社, 1938. 703 p.（ダーウィン全集; 8）

37) Mauss, Marcel.『社会学と人類学II』[*Sociologie et Anthropologie*, 4th ed. Paris, Presses Universitaires de France, 1968] 有地亨，山口俊夫訳. 弘文堂, 1976. 168 p.

38) Vargas, *op. cit*., p. 15-17.

39) Hall, Edward T.『かくれた次元』[*The Hidden Dimension*. New York, Doubleday & Company, 1966.]日高敏隆，佐藤信行訳. みすず書房, 1970. 270, 14 p.

40)次の著作は、ノンバーバルコミュニケーションに関して、心理学を中心に500を超える実験の結果を整理したもの。

　Bull, Peter.『しぐさの社会心理学』[*Body Movement and Interpersonal Communication*. Chichester, Wiley, 1983.]高橋超編訳. 北大路書房, 1986. 276 p.

41) 三浦雅士“舞踊、炎える焦点”『季刊アートエクスプレス』no. 1, Winter 1993, p. 10.

42) *Ibid*.

43) 尼崎彬「身体と芸術：身体の脱秩序化と再秩序化」〈井上俊他編『身体と間身体の社会学』岩波書店, 1996.〉p. 145-162.

44) *Ibid*., p. 150.

45) *Ibid*., p. 151.

46) 小林康夫『身体と空間』筑摩書房, 1995. p. 4-18.

47) *Ibid*., p. 12.

48) *Ibid*., p. 14.

49) 三浦雅士『身体の零度：何が近代を成立させたか』講談社, 1994. p. 8-244.

50) *Ibid*., p. 252.